

最初の背きと最後の赦し

——『失樂園』の主題と構造——

道家弘一郎

The First Disobedience and The Last Forgiveness: the Theme and the Structure of *Paradise Lost*

Paradise Lost begins with 'man's first disobedience' (I. 1) and ends with the scene in which Adam and Eve leave the Garden given the promise of 'the happy end' (XII. 605). In this sense this work is said to be a man-centered story from the beginning to the end, not to speak of his fall.

Nevertheless, Books I, II and III are used to describe the supernatural, such as Satan and the fallen angels in Hell and also God and the Son in Heaven. Adam and Eve do not appear until Book IV.

In this way, although the beginning and the end emphasize that man is the hero of the work, the history of the supernatural beings is much longer than that of man. In other words, Satan's disobedience and the judgment he receives are skilfully enfolded in the framework of man's disobedience and the forgiveness he receives. Therefore, if the former is carefully unfolded, the latter comes to be enfolded in the former both in space and in time.

Thus the cosmos-scaled story points to man, and above all to the freedom of man who is free to disobey the Creator and to fall. Disobedience is the expression of man's freedom, and forgiveness is that of God's love.

I

『失樂園』は、「人間の最初の背き (Of man's first disobedience)」という言葉で始まり、悠々たる大河のごとく一〇五六五行をついやし、最後は、「幸多き終り (the happy end)」(二・六〇五)を約束されたアダムとイヴが楽園を去る場面で終っている。この初めと終りは、第九巻におけるクライマックスは言うに及ばず、この作品が一貫して人間のドラマであることを保証している。

しかるに、第一巻において人間に言及したのはインヴォケイションの二六行だけで、二七行目からは地獄に堕ちた悪魔たちの描写に移る。しかもその描写は大変熱がこもっていて、ブレイクが「ミルトンはそれとも知らず悪魔の味方をしている」(『天国と地獄の結婚』)と評したほどである。ミルトンは人間のことをすっかり忘れたかのように、第一巻も第二巻も地獄(と混沌)の描写についやす。第三巻は一転して天国の話になり、人間が初めて姿を見せるのは第四巻の二八八行になってからである。すでに作品全体の三分の一に近い二八八二行という行数がその前についてやされている。

しかも、叙事詩の作法にしたがって「事件の核心 (in medias res, into the midst of things)」から始めたという言葉が、第一巻の梗概 (The argument) のなかにある。すると、事件の核心は悪魔にあって人間にはないのか、人間は本当はどうでもいいのか、という疑問がおこる。だが、同じ梗概のなかに、「人間の墮落の主要な原因 (the prime cause) であった蛇、というより蛇に宿ったサタン」という言葉がみえるし、第一巻二八一三三行では、一体

いかなる原因がわれわれの先祖を創造主なる神から離し、その意志に背かせたのか、誰が初めに彼らを誘惑し、忌まわしい反乱に駆りたてたのか、と問うている。つまり悪魔の逆逆がそもその原因であって、そこから次々といろんな事態が発生してきたことを示している。そして、それに対抗する力として、騙されて堕ちた人間に救いの手をさしのべようとする神とキリストの姿が第三巻に描かれる。

このように『失樂園』においては、人間の行動が人間のレベルだけで行なわれるものではなく、人間をはさんで神と悪魔との宇宙的な戦いの場となっていることが分る。もし人間の行動が単に人間のレベルでのみ理解されたら、たちまち底の浅い、浅薄な解釈となるだろう。それにひきかえ、もしわれわれの行為が超越的な力の影響のもとに行なわれていると考えることができれば、にわかには深々とした翳をおび、宇宙的な規模の意味を付与されることになるだろう。まして致命的な結果をとまなう決定的な行為であった。これが第九巻や第一〇巻だけから成っていたら、たちまち矮小な家庭悲劇に陥ってしまうだろう。第一巻が人間のことはそっちのけで、すぐに悪魔と地獄の描写に入っていくのには、そういう理由があった。

しかし、悪魔の背きが原因となって人間の背きが生じたとはいえ、自然現象のように必然的に生ずるのではない。もし人間の行為が必然性に縛られていたら、たとえ神に従う行為であっても、そういう自発的な意志によらない強制的な行為からは神は何の喜びもえられないし、人間はまた何の賞賛をえることもできない。人間の行為が神に嘉納されるためには、人間の自由な、心からの服従が前提でなければならぬ。神がその全能をもってすれば、全面的に善き行為を強いることもできたはずである。それにもかかわらず、背きの可能性をさえはらむ自由を許したのは、人間の自発的な奉仕をこそ求めたからである。

第三巻一〇〇—三四行では神がキリストに、第五巻五二四—四三行では天使ラファエルがアダムに、第九巻三五

一五八行ではアダムがイーヴに、かかる意志の自由の問題を語っている。それぞれ存在の上位の者が下位の者に対して、説明ないし警告を行なっている。

だが、自由は、何よりも背きの自由という危険な可能性を含んでいる。墮天使も人間も彼ら自身の自由な意志の選択により反逆したのだ。責任は彼ら自身が負うべきもので、他に転嫁することはできない。神がもし前もって知っていたとしても、その予知は彼らの過ちになんの影響も及ぼさなかったであろう、という(三・一二七—一八)。

ただし、天使は自ら誘惑に陥り、自ら腐敗を求めて勝手に墮落したのに対し、人間は彼の狡猾な策謀に欺かれて墮落したのであるから、人間は恵みを見出すことができるが、墮天使にはできない。「天と地とを通じ、恵みと義ただしさにおいてわたし(神)の栄光は光を放つであろう、だが、恵みこそ初めより終りに到るまで最も強く輝きわたるであろう」(三・一三三—一三四)。

義と愛とは二つながら満たされなければならないけれど愛が義にまさるものであることを、第三巻における神とキリストとの会話は繰り返し述べている(一五〇—一五五、二〇三—一六、二六二—二六五、四〇三—一、および一〇・一〇九—九六)。

こういう、いわば神の愛という磁場のなかにあって、この悪魔と人間との自由な、精いっぱいドラマが展開するのである。われわれが地球の引力の支配のもとにありながら、そういう力を意識しないで自由に、思うさまとんたりはねたりしているのに似ている。

II

物語の順序とは別に、出来事の時間的クロノジカルな順序がある。いま、その順序にそって要約すると、ある日、神はキリスト

を神の摂政として天使たちの首と定め、天使たちに彼を己の主と告白することを求めた。サタンはその傲慢さのゆえに嫉妬にかられ、天使の三分の一を味方につけて天国に反乱をおこした。が、キリストに打ち負かされて地獄に墮ちる。天国では三分の一の欠員を補うために、新しい世界と人間がキリストによって創造される。地獄に苦しむサタンは、この人間を誘惑し墮落させれば、神の意図を覆えし、復讐をとげることができると考え、蛇の体内に入りこんでイヴに近づく。禁断の樹の実を手がかりとして人間を神に背かせ、人間は楽園から追放される。ここから人間の歴史が始まり、やがてキリストの贖罪と復活と再臨。最後の審判によってサタンに惑わされた邪悪な世界は亡び、新しい天と新しい地がもたらされる。実にそれは、天地創造以前から最後の審判以後におよぶ永遠の時間である。

だが作品のなかで実際に経過する時間は、地獄で苦しむサタンが人間を誘惑して、人間が楽園から追放されるまでである。サタンの意図を知った神は、天使ラファエルを遣わして、過去の出来事、すなわちサタンの反逆と天地創造を語らせ、サタンの誘惑に備えさせる。アダムは墮落の後、神は天使ミカエルを遣わし、未来の出来事、すなわちキリストの贖罪と新天地の創造を語らせ、楽園追放後の生活に備えさせる。

ともあれ、第一巻の冒頭と第一二巻の末尾には人間のことが述べられ、第九巻でクライマックスに達する人間の墮落という主題で大きな枠組ができていたのであるが、そのなかには、それを超える次元の出来事が畳みこまれている。それを引き出し拡げ伸ばしたら、逆に、元の枠組をすっぽりと包みこんでしまう。しかもその畳み方は極めて巧妙で、順を追って拡げていくと、人間の墮落という主題にピタリと行きつくのである。

その一例は、『失楽園』にある四つのインヴォケイション、すなわち詩神への呼びかけで、第一、第三、第七、第九巻の冒頭にある。この配置は絶妙で、それぞれその後に一巻と三巻ずつをしたがえている。そして第一巻から第六巻までは天使の墮落、第七巻から第十二巻までは人間の墮落を扱っている。

それぞれのインヴォケイションは、後続の巻に対して有効な作用をもちながら、互いに違っている。第一巻のそれは、十二巻全体への目配りをきかせている。第一・二巻が地獄の描写であるのに対し、第三巻は一転して天国の描写である。本来不可視の神の世界の消息を伝えるために光へのインヴォケイションとなることは当然である。

第四巻においては物語全体の主人公が人間であることを印象づけ再確認するためであるかのように初めてアダムとイーヴの美しい姿と墮落以前の生活が描かれるが、それがサタンの視線を通してであることは銘記されなければならない。この輝くばかりの美しさがいかに脆弱なものか、あたかも黒い額縁に囲われたかのようにサタンの禍々しい力に取り囲まれていることを知らなければならない。

第五・第六巻は天国における反乱である。つまりこの作品の前半においてヘゲモニーを握っているのは善悪いずれにもせよ超自然的な存在であって人間ではない。

第七巻にいたって、ようやく超自然の事柄から自然の事柄に入っていく。ここではウラニアに呼びかけ、「私本来の世界である地上に帰り、……地上に立って……人間らしい声で歌いたい、私の歌はまだその半ばが歌われないまま残っている、——が、その半ばは、この目に見える、日々星辰が運行している、狭い世界にかかわっている」という（七・一六—二四）。

本来ウラニアは「九人の詩女神の一人」であり、その名前がウラノス（天）に由来するがゆえに天文学を司る女神であるが、ここでミルトンが呼びかけるウラニアは、そのようなギリシア神話の女神ではない。天にて生まれ、全能の父なる神の前で姉妹である「知恵」と遊び戯れ、妙なる歌で父を喜ばせた方であるという。箴言八章二—三一節の「知恵」とミルトン自身の『キリスト教教義論』一卷七章の記事とを併せ考えて、ファウラーは、ミルトンのウラニアは創造の行為者「神の子」ロゴスと考えるのが一番よい、と述べている。第一巻で呼びかけたのは「霊」であ

り、第三巻では「光」であり、ここでは「言葉」である。が、ウラニアの名をかりて呼びかけるのが一番ふさわしい、その側面であつた。

第九巻三一行の celestial patroness はウラニアをさすが、ここでは前の三回の場合とくらべて、直接呼びかけることなく Her (422) とか hers (447) とか第三人称を用いている。そして歌う主体は「私」となっている。それだけ歌う主体と歌われる主題との関係が直接的になり、人間だけの世界を確立しようとしている。あるいは、それはこの巻において生ずる天との「断絶 (distance)」(九・九) を先取りしたのかもしれない。これから語ることが、人間の背きであり、それゆえ生ずる神の裁きであつて、「実に悲痛な課題だ！」(九・一三) という。そして先行叙事詩としてのホメーロスやウエルギリウスとの比較や時代と作者自身の抱えている困難が最も痛切に意識され、いよいよ大詰に來たという切迫感がここの特徴である。

III

雨の降りだす前に空の雲行きがあやしくなるように、墮落という決定的な出来事の前に、すでにそれを预示する夢やいさかいや過度の自己主張などがみられる。

第五巻の冒頭にイーヴが禁制の果実を食べた夢を見る場面がある。その巧みな誘惑の論理は、第九巻における現実の行為のさいにもう一度繰り返される。いわば第五巻のそれは第九巻の予告篇である。読者にとってそうであるばかりでなく、イーヴ自身にとってそうであつた。第九巻においてあれほどやすやすと実際の行為に走ってしまった理由は、第五巻においてすでに経験済みで、しかも何の罰も受けなかったことによる。われわれ自身の経験においても、他人のさりげない言葉がヒントになり言訳になつて、とんでもない過失をおかすことがある。そういうふうに、第五

巻が導火線になって、ずるずると第九巻の出来事がおこってしまったふしがある。しかし同時に、これほどの警告が与えられていたのであるから、それに基いて回避することもできたはずだ、という論理も成り立ち、むしろそれが表の論理ではあるが、余りに弱々しい。

あの運命の日、イーヴはアダムに能率的な分業を申し出る。まだ運命の時刻の正午（九・七三九）にはなっていないのに、イーヴの自然観は、墮落後のわれわれの自然観と変らない。「一晩か二晩のうちにこちらを嘲るかのよう」に勝手におい茂り、野性にかえろうとします。……こんな風に一日中余りに近くにいて仕事をしていますと、つい近いままに顔を見合わせたり微笑みかけたりして、或はまた何か目新しいものを見つけては話し込んだりして、一日の仕事に邪魔が入っておろそかになり、せっかく朝早くから始めても結局ほとんど仕事にはなりません。うかうかしているとして働きもしないのに夕餉の時だけがやってきました」（九・二〇九―二五）。庭仕事に手をやいているイーヴのこの焦立ち。第八巻においては、ラファエルとの天文学的論議にふけるアダムを残して、イーヴは一人だけで庭の仕事に出かけた。実際には彼女一人の分業であったが、妻らしい謙譲を失わないかぎり自然の祝福に変わりはなく、墮落以前の牧歌的調和があった。

イーヴの申し出に対するアダムの返答も面白い。「神がこの地でわれわれに課し給うた仕事を最もよく果たすにはどうしたらよいか、お前はいろいろ思いめぐらし、立派な提案をしてくれた。私からも賞めないわけにはいかない。何が女にとってふさわしいといっても、家事に励み、夫を助けてその仕事の手伝いをするほどふさわしいことはないからだ」（九・二二九―三四）。妻の提案を結局はしりぞけるただけに、これだけの前口上を必要とする人間関係は、相当に厄介なものだと思わざるをえない。

先に言及した第五巻の夢のなかでも、夜空に星が輝いているのはお前を見るためだ、森羅万象はお前に憧れ、お前

の姿を見ると歓喜に酔い、お前の美に魅せられて恍惚となり飽くことなく見つめようとすると、という囁きをイーヴは聞く。こんな夢を見る女とは、よくよく阿諛追従になれた、傲慢な女だと思ふ。われわれは『失樂園』を特別な詩だと思つてゐるから、こういう個所を見過ごしてしまふが、もしこれが日常的な普通の物語に出てきたら、イーヴの傲慢さにあきれるだろう。ともあれ、この傲慢に墮きの原因があつた。

神が天使や人間の自由を尊重するように、アダムもイーヴの自由を認めなければならなかつた。「自由な意志からでなければ留まるのも遠くに去るのと同じだ」(九・三七二)と、アダムは言う。イーヴはアダムの不安をよそに、「夫の手から自分の手を離して」(九・三八五)森の方へ歩いていった。手を握り合うことは信頼、忠実、あるいは一致のしるしと考えられる。読者の目に最初に触れたとき、どんなカップルよりも美しいこの二人は「手に手をとって歩いていた」(四・三二一)。その二人が今、手を離したのである。そして二人が再び手をとって歩く光景は、樂園を追われて出ていく第十二巻の最終行まで待たなければならぬ。手を取り、手を離し、手をとる。ミルトンは手に大きな意味をこめていたように思ふ。まして盲目のミルトンにとっては、単に象徴的な意味だけではなかつたに違いない。

これから墮落に至るまでの経過は実に面白い。彼女は一人働きに行かせてもらうかわり、正午までには必ず帰り、昼の食事と午後の休息も楽しいものにしますから、と約束する。亭主の反対を押しきつてパートに出かける主婦のやうな科白。蛇がイーヴの美貌を褒めちぎると、イーヴは、「蛇さん、あなたは褒めすぎよ、そこまで言っちゃ、あなたが試食したというその果物の効力もあやしいものだわ」(九・六一五—一六)というが、嬉しくないわけはない。イーヴは蛇の術策にのり、彼女の論理は自動機械のように展開して、禁制の果実を食べた。

彼女は酒にでも酔つたようになり、これからは毎朝神に捧げてきた祈りをこの樹に対する賛美に替えようといひ、

じじつ、この樹から離れるときは低く頭を垂れて拝んだ。真の神からの背きはたちまち物神崇拜を生んだ。

「それにしてもどんな風にしてアダムの前に出たものであろうか？」（九・八六一一七）彼に知らせてこの幸福を共有しようか、それとも独り占めにしておけば、女に欠けたものを補って彼と同等となり、いつの日か彼の上に立つ人間になれるかもしれない。「隷属している者に自由はない」（九・八二五）と、イーヴは思う。

だが、もし死んだら、「私はこの世からいなくなる。そしたら、アダムは別のイーヴと夫婦になって楽しく一緒に暮らすに違いない、——この私が死んでいるというのに！ おお、考えただけでも死ぬ思いだ！ そうだ、私の決心はついた、幸不幸いずれにせよ、アダムには私と一緒に暮らして貰おう。私は彼を深く愛している、だから一緒にならどんな死にも堪えられる、しかし、一緒になければ、たとえ生きていても生きていることにはならない！」（九・八二七—三三）

アダムはイーヴの帰りを待ち侘び、彼女の庭仕事の骨折りの褒美にしようと花の冠を作っていた。しかし、すべてを知ったとき、花の冠は、急に萎えてしまった彼の手から落ち、バラの花もことごとく凋んで散ってしまった。アダムは直ちに死ぬ決心をする。

「お前なしでどうやってわたしは生きてゆけよう？ お前とは固く結ばれている、そのお前との楽しい語らいと愛の生活を棄てて、この寂しい荒涼たる森の中でどうして独りで生きながらえることができよう？ たとえ神がもう一人別人イーヴを造られ、わたしがそのためにもう一本の肋骨を提供するとしても、お前を失った痛手は絶対にわたしの心から消え去るまい、そうだ、絶対に消えまい！ わたしは自然の絆きずなが自分を引きずってゆくのを感ずる。わたしの肉の肉、わたしの骨の骨、それがお前なのだ。お前の境涯からわたしは絶対に離れないつもりだ、——幸、不幸いずれの場合にしてもだ！」（九・九〇八一—二六）

このような悲壯で崇高な決心にもかかわらず、アダムはイーヴを咎めたり、きつと死なないですむだろうと気休めを言ったり、味わえば天使になれるかもしれないと思ったり、神も最高の被造物である人間を亡ぼしてサタンに勝利を収めさせることはあるまいと言ったりする。このような動揺が、墮落以前のアダムにすでに見られるのだ。墮落以前の人間の心理は知るべくもないが、これでは余りにも墮落以後の人間の心理ではないか。

「それはともかく、わたしはお前と運命を共にし、同じ審判を受ける覚悟だ。死がお前の道連れなら、その死はわたしにとって生命と同じものだ。それほど強くわたしは心のうちに自然の絆が自身のものへ、お前の内にあるわたし自身のものへ、と自分を惹きつけるのを感じる。なぜなら、まさしくお前そのものがわたしのものに他ならないからだ。われわれの境涯は切り離しえないものだ。われわれは一つだ、一つの肉体^{からだ}だ、お前を失うことはわたし自身を失うことだ」(九・九五—五九)。

自分のために死さえも喜んで受けようとするアダムに、イーヴは抱きつき、喜びの情に溢れて泣く。それでいながら、ほんとうに死を招く樹の実ならあなたに勧めはしない、あなたの真実の愛情を知った今は、あなたを死に捲きこむくらいならあなたに捨てられて死んだ方がよい、しかし事実は予想と違い、死どころか一層力強くなった生命をもたらす、といってイーヴはアダムに樹の実を渡す。こんな理屈をこねてアダムをどうしても自分の運命に引きずりこもうとするイーヴの執念には恐怖をさえ感ずる。

「人がその友のために自分の命を捨てること、これよりも大きな愛はない」(ヨハネ伝一五・一三)という。このキリストの愛にも近いアダムの崇高な行為にもかかわらず、その行為の結果は肉欲に溺れていくことであった。墮落以前の性は美しく魅力的に描かれていたが、墮落以後の性は蠱惑的な魔力をもつて描かれている。

しばらくの時間の経過の後に、彼らが知ったことは確かに善と悪とであった、しかも善が失われ悪が生じたこと

と、己が裸形の醜さであった。そして罪のなすり合いが始まる。「なぜ一人で行った」、「なぜ行かせた」、「お前が失われたのを知ったとき愛情に变りがないことを身をもって示したというのにその返礼がこれか」といった具合に、どちらも自分自身を責めようとはせず、互いに非難し合い、いつ果てるともなく空しい口論は続いた。

IV

第九巻は、神にもしばらく席をはずしていただいて、実に人間的な遣り取りが続いた。それに対して、その結果の跡始末でもある第一〇巻は、事務的あるいは儀式的なテンポで事が運ばれていく。舞台は天上であり、地上であり、地獄である。

天上における神と御子との会話ののち、キリストが審判者として地上に送られ、蛇には地を這い塵のみを食らう罰を、イヴには苦しみのうちに子供を生む罰を、アダムには額に汗して苦しみのうちに食物を得なければならぬ罰を課した。と同時に、アダムとイヴの裸形を憐れみ、自ら獣の毛皮をととのえ、彼らを覆った。

一方、意気揚々と戦勝報告に帰ったサタンは、万魔殿をうめつくした仲間の墮天使とともに蛇の姿に変えられた。

「顔が引き攣^{ひきづ}って細くとげとげしくなり、両腕が肋骨にくっつき、両脚が互に絡み合うのが感じられた。かと思うと忽ち両脚がすくわれてどつと倒れた。そして、そこには腹這いになったまま必死に、だが空しくもがいている一匹の巨大な蛇の姿があった」(二〇・五一—一五)。彼らは声もただしゅっしゅっという罵^{のの}声しか発せられなくなってしまう。懲罰をいっそう厳しくしようとする神は、禁断の樹に似た樹を多く生ぜしめる。渇きと飢えに苦しむ彼らはその果物を貪り食うが、果物と見えたのは苦い灰で、唾もろとも吐き出す。そんなことを性^{さが}こりもなく何度も繰り返し、疲労困憊してしまった。

ところでアダムは、すべてのものが彼の墮落とともに墮ちて呻き嘆くを見て、いまさらながら現在の惨状を呪う。そして「最後に落ちつくのは、自分が悪かったという罪の自覚」(二〇・八三一—三三)であり、「罪の重荷は地球よりも重い、いや全宇宙よりも遙かに重い」(二〇・八三五—三六)と感ずる。そして自分を騙したイーヴを詰る。

だが、そのとき一つの転機が生じる。イーヴはアダムの難詰にも怯まず、とめどなく溢れる涙を拭おうともせず、髪をふり乱したままアダムの足もとに身を投げ出して、その足を両腕でかき抱きながら、彼の赦しを求めた。

「アダムよ、そんな風に私を見限るのはやめて下さい！ おお、天も照覧あれ、私がどれほど強い愛情と尊敬の念をあなたに対して抱いているかを！ そしてまた、私が不幸にも騙されて不用意に罪を犯してしまったことを！ 私は今一人の哀願者としてひたすらあなたの情に縋り、あなたの膝を抱いてお願いします。どうか、私の生命の糧であるあなたの優しい顔を、援助の手を、この苦しい悩みに際しての忠告を、私のただ一つの力と支えとを、私から取り去らないで下さい。あなたに棄てられたら、私はどこへ行き、どこで生きてゆけばよいのでしょうか。私たちは、生きてゐる間は、——といっても僅か一刻にもみたくないでしょうが——二人で平和に暮らそうではありませんか。共に禍を招いたように、今こそ心を一つにして裁きによつて私たちの仇敵だとはっきり定められた、あの残忍な蛇に対する怨恨を鎮め合おうではありませんか。どうか、私たちの身に生じたこの惨めな禍のゆえに、あなたの憎悪の念を私に、——既に失われてしまった私に、あなた以上に惨めな私に、向けないで下さい。私たち二人は罪を犯しましたが、あなたはただ神に対してのみそれを犯し、私は神とあなたに対して犯したのです。ですから、私は審判の座に帰り、大きな声で神に向かって哀願するつもりです。——主の宣告された罰をあなたの上に下さないで、悉く私の上に、あなたの身に降りかかったすべての禍の唯一つの源である私の上に、主の御怒りが加えられて当然な私の上に、ただ私の上にのみ、下して下さい、と」(二〇・九一四—三六)。

ここでは最初の保護の嘆願が、最後にはそれとは逆に、自分一人で責任を引き受けようという態度にかわっている。利己的な態度から、自己を捨てて態度にかわった。イーヴのこういう言葉を聞けば、アダムの頑な心の中にも同情の念がこみあげてくる。ましてや、つい先程までは自分の生命そのものであり、唯一つの喜びであった女だ。あの美しい女が、今、悲しみに打ちひしがれ、足もとにひれ伏して和解を求めている。アダムはあたかも心の鎧をぬぐうに一切の怒りをかなぐり捨て、優しくイーヴを抱きおこす。

二人は互いに責め合うことをやめ、悲しみを分かち合おうとする。しかし彼らの子孫が死の餌食になることに耐えられず、イーヴは、まだ子孫がないうちに自殺しようと提案する。だが、アダムはこの提案には少しも心を動かされることなく、イーヴの末裔が蛇の頭を砕くという神の宣告を信じて生きてゆくべきことを諭す。自殺という自己本位な行為は神を怒らせ、「永遠に生ける死」(一〇・七八八)という罰をうけるかもしれない。むしろ、神の恩寵にすがれば、多くの慰めに恵まれ、なに不自由なくこの人生を送ることができる。「神がわれわれを裁かれたあの場所に引きかえし、うやうやしく神の御前にひれ伏し、謙虚な気持で自らの罪咎を告白して許しを乞い、いささかも偽りのない悲しみと柔和な謙遜のしるしとして悔いた心から迸り出る二人の涙で地面をうるおし、二人の溜息でそのあたり一帯の空気をみたそうではないか？」(二〇・一〇八六―九二)というアダム³の提案が一二行後には言葉どおりそのまま実行されている。こういう反復には、一種の儀式性が感じられる。

また、先ず人間相互の赦しが行なわれ、そのあとに神の赦しを求める心が働いていることに注目したい。回復もまた自然的・人間的次元から始まったのである。

第一一巻においては、御子は、今や悔い改めたアダムとイーヴの祈りを父なる神に示し、二人のために執りなす。だが、神の義は二人が楽園に住むことを許さない。二人の追放のために、神はミカエルと天使の一隊を遣わす。だ

が、追放に先立ちアダムに未来に起る事柄を示すようミカエルに命じたのは神の愛であった。神の救いが歴史的順序を経て実現されることを示す。第一一卷では、ノアの洪水にいたるまでの出来事が幻を通して示される。

第二二巻では、洪水後の出来事、約束された「女の裔」とは誰のことか、その受肉、死、復活、昇天、再臨が説明される。時満ちて救い主が再び来たりたもう壮大な世界の終末の物語を聞いたアダムは溢れる喜びと驚きの念を抑えきれず、次のように言う、「おお、まさにこれこそ無限の恵み、廣大無辺の恵み、この善きものをすべて惡より生ぜしめ、惡を善きものに変え給うとは！ この神の恵みは、創造の働きを通して初めて暗黒より光を生み出されたあの恵みにもまして驚異にみちたものといえましょう！ 今にして私は迷わざるをえません、——果して、私が犯した、また私が原因で引き起されてゆく罪を今こそ悔いるべきか、それとも私の罪からさらに善きものが生じ、——神にはより大いなる栄光が、人には神のより多くの恵みが生じ、さらに御怒みいかりに対してはそれを蔽う恩寵がみち溢れることを、今こそむしろ喜ぶべきかどうか、と」(二・四六九—七八)。

この世は、善なる者には禍を、惡しき者には幸いを、もたらしながら、自らの重荷に呻きつつ時を経てゆくが、「最後には、「キリストが」雲に乗って父なる神の栄光のうちに天より現われ、サタンとサタンに惑わされた邪惡な世界とを亡ぼし(dissolve) ついに炎々と燃えさかる焰のなかから、淨められ廓清された新しい天と新しい地を、また正義と平和と愛とにもとづく永遠無窮の代々を起し、やがてその実りを、歡喜と永遠の祝福の実りを、もたらし給うであろう」(二・五四五—五一)と、ミカエルが語る。

ここで興味ぶかいことは、「サタンとサタンに惑わされた邪惡な世界」が亡ぼされることである。ヨハネ黙示録二〇章においては、サタンや惡人たちは、地獄で永遠の苦痛という刑罰をうけることになっているが、一七世紀になると、このような神の義の厳しさには耐えられず、むしろ万人を救済する神の愛を強調する方向に向かった。また、新

新天地の到来の後にもなお、このような汚れた場所がしみのように残っていることを嫌った。神が「すべてにおいてすべて」(コリント前書一五・二八、『失樂園』三・三四一、六・七三二)となるとき、一点の瑕瑾もあつてはならなかった。瑕瑾は神の全能に反する。『失樂園』のなかには、「唯一人の全能なる神がこの世に在し給い、すべてはその神から生じ、また善より逸脱しない限り再び神へともとてゆく——すべては、もともと完全に善きものとして創造されたものであったからだ」(五・四六九—七二)とか、更に驚くべきことに、蛇の姿にかえられた墮天使たちに聞し、「やがて神に許されて、失っていた元の姿に戻ることができた」(一〇・五七四)という言葉がある。神はサタンをもその逆を dissolve することによって赦されたのである。

V

『失樂園』の構造は実に精緻である。わたしは先きに、人間の最初の背きと最後の赦しが作品の枠をなし、そのなかに悪魔の最初の背きと最後の赦しが畳みこまれていると述べたが、こういう人間界と超人間界、さらに善悪二つの超人間界相互の対応が、いたるところで巧妙に構築されている。いま全一二巻を時計の文字盤のように並べるならば、縦軸を対称軸として左右が線対称となり、中心点をめぐって点対称となるのである。

たとえば、第一・二巻は地獄の光景であり、パレスチナで選民を苦しめた墮天使たちのカタログであるが、第一・一二巻は、地獄にもたとえられる此の世で、悪との戦いに苦しんだアダムと未信者のカタログである。第一巻ではサタンが「われわれは鋭意、神の目的を攪乱し、絶えず善から悪を導き出す手段を見出すよう努力しなければならぬ」(一六四—一六五)というが、第二巻ではアダムが「善きものをすべて悪より生ぜしめ、悪を善きものに変えなう」(四七〇—四七一)神の恵みに歓喜の声をあげている。第一巻のサタンは「弱い」ということは哀れなことだ、あ

えて事を行なうにしろ、事を忍ぶにしろ！」（二五七―五八）というが、第二二巻のアダムは「一見弱そうに思えるものをもってこの世の強大なものを破る」（五六七―六八）ことこそキリストによって教わったことだという。

点対称の例を挙げるならば、第一・一二巻と対称となるのは第五・六巻である。第五・六巻はラファエルが天上におけるサタンの背きに始まった善悪両天使の戦いという過去の出来事を語るところであるが、第一・一二巻はミカエルが地上におけるアダムの背きに始まった人間の善悪の戦いという未来の出来事を予言する個所である。第五巻におけるアダムとイーヴの朝の祈り（一五三―二〇八）は、主として詩篇にもとづき、日月星辰をはじめ森羅万象に呼びかけて、その造主を讃えるが、キリストは登場しない。だが第一二巻で、アダムが贖罪主にして救主なるキリストの範例によって、従うことこそ最善であり、信仰をもっている者にとっては死も永遠の生命にいたる門にすぎないということを学んだという、ミカエルは「それが理解できた以上、お前は最高の知恵をえたということが出来る。もうそれ以上の高い望みをいだいてはならない、――よしんばお前がすべての星の名や、すべての天使や、すべての永遠の秘密や、すべての自然の現象、つまり天と空と地と海における神の造り給うたもの、を知り、この世のすべての富や、すべての支配権、一大帝国を手中に収めることが今後できたとしてもだ」（五七五―八二）という。この対照は極めて重要な内容を含んでいる。

最後にイーヴは、「私のせいですべてが失われたとはいえ私から生まれる、あの約束された御子がすべてを回復し給うという、身に余る恩寵（めぐみ）を示された今、私はその慰めを心にしっかりと抱いて、ここを立ち去りたいのです」（六二〇―二三）という。ドラマであれば、これが最後の科白になる。そしてアダムとイーヴの姿は「家路を急ぐ農夫」（六三二―三三）にたとえられる。第四巻で初めてアダムとイーヴが登場したとき、「アダムはその後彼の子として生まれたどの男性よりも容姿端正であり、イーヴも彼女の娘として生まれたどの女性よりも麗わしかった」（三三二―

四)。イーヴは神話上のあらゆる美女に比較され、その誰よりも美しかった(五・三八一―八二、九・三九三)。この世界最高の美男と美女が、読者の目に最後に刻みつける姿は、素朴な農夫の姿である。作者ミルトンのメッセージがどこにあるかは明らかである。